

食生活と人格形成に関する研究 第3報 一女子学生の嗜好に対する態度
と性格特性について一

郡山女子短大 ○林借子 石村由美子 遠藤順子

目的 どのような食生活のあり方が望ましい人格形成につながるものであるかを捉えるため、我々は前2回に亘り、食生活の基礎ともなる嗜好と性格特性との関連について報告してきた。その結果嗜好と性格特性との間に、女子学生、男子学生の双方に共通した関連性が認められたので、今回は嗜好に対する具体的行動傾向と性格との関連性を捉えることにした。即ち前2回の結果捉えられた嗜好と性格特性の関連が、嗜好に対する具体的行動（対処の仕方）に於てもみられるのかどうか、又両親の嗜好に対する対処の仕方との関連、食事に対するしつけとの関連について捉える試みを行った。

方法 質問紙により好きな食物、嫌いな食物を順に5つ挙げさせ、嫌いな食物に対する対処の仕方を8つの選択肢から選ばせ、同時に子供の立場からみた両親の嫌いな食物とその対処の仕方を同様に調査した。そうした対処の仕方を生み出すひとつの原因と思われる初見期に於て受けた食事についてのしつけも、10の選択肢から選ばせ、更に嫌いな食物への望ましい対処の仕方について3つの選択肢から選ばせることで、実際にとっている対処の仕方との一貫性をみることにした。

結果 ①全体的傾向をみると嫌いな食物としては野菜類が1位で、次いで魚介類、獣鳥肉類などがあげられた。②嫌いな食品に対しては「絶対食べない」対処の仕方が各性格型に共通して多くみられる。③初見期に於けるしつけでは「好き嫌いをなく食べるように」が一番多い。④嫌いな食品への望ましい対処の仕方として「嫌いなものでも食べるようにした方がよい」と考える者が多い。以上意識と態度レベルに一貫性を欠く傾向がみられた。